

聞名仏教

第 120 号 毎月発行
(発行日) 2020 年 9 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

私が私になる道

これを仏教の教
えから伺うと、こ
ういえるのではな
いでしょうか。
人にはそれぞれ

著名な評論家だった小林
秀雄が「彼は科学者にもな
れただろう、軍人にもなれ
ただろう、しかし、彼は彼
にしかなることはできなか
った。これは驚くべきこと
ではないか」と言っているま
す。これが「驚くべきこと」
かどうかは分かりません。
しかし、このことを身近
な自分の人生に当てはめて
「私は科学者にもなりたか
った。芸術家にもなりたか
った。しかし、私は平凡な
私にしかなることはできな
かった」というのなら、多
くの人が実感していること
だと思えます。

小学校の頃は学校の先生
から偉人の話を聞いて、有
名な偉人になりたいと思い
ましたし、中学校になると
人気の芸能人になりたいと
思ったりしました。高等学
校に入ると有能な科学者に
なりたいたいと思ったこと
もありました。そして結局はた

だの人にしかならなかった、
などというのが多くの人の
実感ではないかと思えます。
有名人とか優秀な芸術家
とか科学者などを目的にし
ても、実際になれる人はひ
とにぎりの人だけであって、
多くは平凡な市民に終わる
のでしょう。ですからもし
人生の目的がかような理想
的な人物になることであれ
ば、多くの人は失望やあき
らめの中で人生を終えてい
くことになります。

ではなぜ「彼は彼にしか
ならなかったのでしょうか」
か。
一般にはその理由を「努
力が足りなかったからだ」
とか「運が悪かったからだ」
とか「生まれつき能力が無
かったからだ」とか、ある
いは「時代や環境が悪かつ
た」などを理由に挙げるで
しょう。

過去の業(宿業)があつて、
それが主な原因で「彼は彼
にしか成れなかった」と。
宿業とは、人がこの世に生
まれる前の世からの善悪な
どの行為のことです。それ
らの積み重なりと他のさま
ざまな他の条件があいまつ
て、ある特定の人として生
まれた、ということです。

ですから人は生まれた時
から人それぞれが過去を背
負って生まれてきた。それ
を宿業の身といえます。だ
から人に違いがあり、また
それ故に理想的な人になる
ことは難しい。こういうの
が仏教からの説明になると
思えます。

ただ仏教は、宿業で人の
上の違いを説明するだけで
はありません。もっと積極
的な意味で人生を考えます。
それは「彼は彼にしかなら
なかった」ということは「彼
は彼にはなることはできた」

ということでもあります。
そこで、だれでも「私は
どんな人にもなれない。私
は私にしか成れない。私は
私以外の人になることはで
きない。しかし私は私以外
の人になる必要はない。私
は私自身になっていけばい
いのである」という風にも
いえるのです。

であれば私は私になつて
いけばいいのであつて、私
以外の人になる必要はない。
むしろこれが人として自然
で無理のない生き方だと思
います。

ただ問題は「私は私にな
つていけばいい」のですが、
一つだけ大事なことがあります。
人はそれぞれの個性を持
っています。世界で同じ人
縁によつてみな違いがあり
ます。色にも様々な色があ
るように。赤色もあれば黄
色もあり、青色もあれば紫
色もある。色は千差万別で
す。そのように人間も千差
万別です。

ただその色が色として発色しているか、発色せずに暗いままか、ということがあります。たとえば、大小さまざまな色の電球があると思います。私はその中の小さな緑色の電球だとします。

もしこの電球が中に光がともってなければ、色は全体的に暗いので色としての良さが発揮できません。もし中に光がともると、どんな色の電球もそれなりに良さを発揮して美しいのです。大小形や色は色々あります。

このように、人はそれぞれの個性があります。しかしその人の心の中に光がともっていないければ、個性（宿業の身）は良さを発揮できにくいでしょう。花が咲かずにつぼみで終わるようなものです。

もし心の内に光がともれば、その人はそれぞれの色合いがありながら、尊いと思います。

かせることができずにはありませんか。自分以外の人が成れなくても、私は私になつていくことができます。その私は私なりに小さな輝きが可能であるといえます。

經典にはこのような光景を「青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり」と説かれています。これは『佛説阿弥陀経』の言葉で、

浄土の中にある蓮の花にはいろいろな色の蓮の花があつて、それぞれに輝いていくという描写で浄土の徳が説かれています。經典は多く象徴表現を取りますが、この言葉の意味を上のような意味に受け取ることもできます。

人はそれぞれの心の中に光をとることができ、それが佛道だといえましょう。自分の心に光がともれば、人が人として「人間成就」を果たすことができます。

ではどうしたら、心に光をとることができるか。そこに仏教各派があります。

それには自分の中から光を発揮する方法がありました。いわゆる聖道門の仏教といわれるものです。しかしこれは大変困難な道です。

それに対して、人はアミダ仏の光を浴びて、その光を受けてその人の心の中に光がともる。そういう道があります。それが浄土門の仏教、浄土真宗であります。

月はそれ自身で光ることはできませんが、太陽の光を受けて、自分を明るくすることができるよう、私たちは自分で自分を光らすことはできませんが、アミダ仏の光を浴びて、その光が私の心に届いて、私の心の中に光がともるのです。これは誰でも可能な道なのです。

こうして、「私は私にしか成れないが、私以外になる必要はなかった、私は私になつていけばよかった」と本当に言い得るのは、私に光をいただいたことによつてでありましょう。

つけ加えますと、欲が深いとか怒りが大きいというのは個性ではありません。それは煩惱が大きいだけであつて、そういうのを個性とか性格とか才能とかいうのではありません。

煩惱の強いのは個性や性格とは別であつて、「私は欲が深い性格だ」と聞くことがありますが、それは性格というよりは煩惱が強いということです。

欲が深いという心は宿業の結果といえますが、しかしながらこれも光にあうと、「転じて善となる」（悪を転じて善となる）のでありましょう。煩惱自身が輝くと言うことはいえませんが、仏の光にあつて、光を反射するという意味に転換することができまます。これは個性がそのまま光によつて輝くというのとは違って、さまざまな煩惱は光を映し出す縁になるといふ、そういう転換点になるといふことです。

たとえば、欲が深くても、欲が深い自分であるということをお念仏を申

すと、それが縁となつてそこに阿弥陀様のお心が知れてまいります。いわば、煩惱はお念仏（光）によつてアミダ仏のお心を知らされる縁になるといふことです。こうして個性や性格は光を受けて、それなりの色で輝くことが可能であり、煩惱は光を受けて仏のお心に触れる縁に転じる。どちらも南無阿弥陀仏の光明の用きであります。

(了)

【住職雑感】

安倍首相が持病の悪化で首相を突然辞任。長い政権運営の中で、一番危惧するのが、よその国では

当たり前というところで集団的自衛権の行使に道を開き、海外への派兵を可能にする道を開いたことである。近年のナショナリズムの上げ潮によつて、周りの国の軍事力の強化や領土の侵犯の怖れから、日本も自国を護ることに力を入れなければならぬという論評が高まる中で強行採決された法案であるが、たとえばアメリカの強い要請があれば、海外に派兵せずにはおれなくなり、当然しやすくなる。そうすると敵対視する勢力と対峙することになるので、日本の安全には寧ろマイナスになるのではなからうかと案じられる。政治に疎い私の愚かな杞憂でなければよいが。

木村無相さんの念仏 II

(8月号よりの続き)

自己凝視

さて、どれほど煩惱が盛んに起ころうとも、罪が深かるうとも、粗悪な性質の者であろうとも、「そのままなりで我が名を称えよ、かならず助けろ」と仰せられるアミダ仏の誓願は、煩惱を少しも始末することができずに全く困窮していた無相さんに道を開いたのです。その喜びを詩にこう表現しています。

道がある

道がある

たった一つの道がある

ただ念仏の道がある

「極重悪人 唯称仏」

このように煩惱があるまま、でナンマンダブツ・ナンマンダブツと称える念仏に道を見出した無相さんでしたが、そこに腰を下ろすことなく、熱

心に聞法を続けていったのです。それは、この「ただ念仏」で本当に満足ができるかという問いを抱えての聞思の歩みだったといえます。いわば、親鸞が「しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん」と問うた、念仏における「信心」の問題だったと思います。

「ただ念仏」で道は開けましたが更に、避けることのできない信心の問題に粘りづよく問い続けたのでした。

信心を問題にすることは必然的に念仏をいたたく側、すなわち人間の側を問題にすることでした。それは、「ただ称えるばかりでよい、かならず浄土に生まれさせる」と仏は仰せくださるのですが、それほどまでに無条件に助けられねば助からぬほどの「無知無能・罪悪深重の私」を聞くことでした。「唯念仏」(ただ仏の名を称えよ)と仰せをかけられているものは極重悪人で

あり、極重悪人を目当てに喚んでくださる本願なのです。「我が名を称えよ」と仰せられる仏の慈悲の、底なきほどに深いことを身に沁みて感じ取る者は、「極重悪人の私」と知らされた者であります。ですから念仏往生の願を本当にいただきつくしていく聞法は、どこまでも自分の煩惱・罪悪の深さを仏の言葉によって凝視していく道でもありました。無相さんにこんな詩があります。

雪がふる

雪がふるふる

煩惱無尽と

雪がふる

雪がふる

大悲無倦と

雪がふる

雪がふる

無信の者

そうした念仏の信心を課題にしての聞思を長年続けていく中で、親鸞の『唯信鈔文意』の次の言葉に大変驚かれたのでした。

「釈迦如来、よろずの善のなかより名号をえらびとりて、五濁悪時・悪世界・悪衆生・

邪見無信のものに、あたえたまえるなりとしるべしとなり」お念仏は、単に貪欲や瞋恚といったいわゆる倫理的・情念的な煩惱を抱えた者だけではなく、仏語を無視し、己の我見をつのつてやまない邪見の者や、どれほど仏法を聞いても信じることのできないような無信(闡提)の者までも、見捨てずに助けんがため、仏より与えられるもの、それが今称えられている名号であるという、このお言葉に目をとめた無相さんは、

「私はこの無信の者というお言葉に、いきなり足を払われたように、驚かされたのでした。私のもとと無信の者であるのなら、私がどれだけ自分の力で信者になろうとしても、なれる筈がない。もともと信者の芽がでるような種が無い、根が無いのですから。私としては信ということには、全くお手上げの外は無いです。そういう私に残された唯一つの道は如来さまが、よろずの善の中より選びとりて、おあたえくだされるという南無阿弥陀仏の名号を、ただただお与えのまんまに、ナムア

ミダブツ・ナムアミダブツと、悪衆生・邪見・無信の者のまんまに、信者になれぬ、そのままで、おいただきするより外に私の道はないのです。」と書かれています。いくら聞法しても信じることのできない私のような愚かな者にこそ、名号を与えてくださるのであったかと仏の大悲に驚くとともに、いよいよ自分が無信の機(者)であることを身に沁みて受け取られたのでした。その後しばらくして無相さんから、香樹院師の次の言葉がいかにも有り難いと何度も書いてこられました。

「江州長浜のさだ女、香樹院師に随い、聞いても聞いても疑いが晴れず、加賀まで随い行きしが、師いわく、『雪も降り寒くなるゆえもう帰れ』。さだ女いわく『私はどうもきこえませんがいかが致しましやう』。師いわく、『そのまま称えるばかりで御助け。その外になにもいらぬぞ』(「安心小話」より)

これは先の『唯信鈔文意』のお心と表裏をなすものとい

えます。

無相さんはお念仏の上に、全く無条件に助けたもう如来の無窮の大悲を感じながら、しかもその仏心は、無相さんの内に潜み入って、仏法も信心気もない、助かる縁のチリばかりもない自身の姿を照らし出していったのでした。

仰せばかり

老齢でお金も乏しく、身寄りも無いにひとしく、しかも病気で何度も入院をするという限界状況の中で、念仏聞思の生活が深められていきましたが、七十七歳の時に、

「ふっと自分の自性は、そして私の根本無明は、根本煩惱は我が身可愛いやの我愛・我執・我欲であるとしたたかに気づかされたのでした。(法友への便り)」

その時をきっかけに「ただ念仏」がしっくりといたただかれ、それを「自分で「大実感」と言っておられました。お手紙には「(七十七歳の八月)までの念仏一つ、ただ念仏は、もう一つ、ウス紙一枚のはつきりしないものがありました」と回想しておられます。

その大実感から、無相さんの便りは素晴らしく有り難くなったのを、未熟な私も感じました。故西元宗助先生は「晩年の木村無相さんの信の世界は幽邃である」と仰せられたのを記憶しています。

大実感までの「ただ念仏」は、煩惱具足の邪見無信の身に「ただ念仏せよ、かならず助ける」との仰せのままに、ただ念仏するばかりであると言われる中で、どうにもならぬまま、ただ念仏申すほかなしという、称える私の側になお微かに重心がかかっていたのではないかと、僭越ながら思うことです。しかし大実感以後は、「ただ称えよ」の仰せの内実である「仏の深重のご恩」を聞くというところに全重心がかかったように思います。

「ただ称えよ」の仰せを聞くだけ、その仰せざりで、腹のふくれた無相さんでした。法友への便りの中で、
「(如来さまは)お前の往生極楽、生死出離については、とてもお前の力ではできないから、この弥陀が、お前の往生極楽、生死出離の一切は、

全部この弥陀がひきうけて、始末をつけてやるぞよ、この弥陀に始末をつけさせてくれよ、との如来さま、ジキジキの仰せがいまのナムアマミダブツだそうであります。この如来さまの仰せ、この如来さまの、ジキジキのおひきうけの仰せの他に、このナムアマミダブツの他に、なにがいりましよう。」

と書いておられます。私への最後のお手紙(亡くなられる半月前)にも、
「いつまでも、いまのままナンマンダブツ、これだけです。そのお念仏も称えられなくなったら、それはまたそれでいいですよ。ノドモトでも称えることができなくなっても、如来さまの『生死マルオヒキウケ』にはすこしもかわりないそうですよ。――凡夫の方のハカライやまぬも、ミダにまかせられないも、ナニ一つ関係はないのです。如来のお助け、お引受けには、ただただ、ただ念仏せよの『仰せ』だけ、『勅命』のホカはナニモイラヌラシイですよ。」

とありました。そこにはもはや私が念仏するとか、しないとかいう人間の側にポイントがあるのではなく、「ただ称えよ」の仏の仰せがそのままお助けであり、仰せを聞いてい

るほかに信心とて無いのでありました。「我が名を称えよ」の仰せのままにただ称えているまが、仰せを信じていることになっていたのでした。念仏申すまが仏心聞いていたのでした。私の助かるわけは、全面的に如来大悲の誓いの上にあり、如来が私を助ける全責任を負いたもうことの上にあること、そのことを私どもに知らせるみ言葉が南無阿弥陀仏でありました。最晩年の歌につきのような極めて有り難い歌があります。

み名よべば
弥陀の仰せの 聞こゆなり
汝を迎えんと
名となりて来し

そして、昭和五十八年一月六日に満七十九歳で往生されましたが、亡くなられる三日前に武生市の病院に最後のお別れにまいりました時、震える手でこう書いてくださいました。

生き死にの 道はただただ
ナムアマミダ
唯称えよの 仰せばかりぞ
これらの歌に、念仏がそのままの仰せであり、仰せが聞こえているまが救済であるという真宗念仏の本義が全現しております。
生涯の最後に無相さんは、

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ
ひと声 ひと声
如来のお出まし
ひと声 ひと声
浄土真宗
と讃仰しています。

一声のお念仏に、大慈大悲の如来そのものを仰ぎ、そこに浄土真宗全体の結実を見届けた木村無相。今日、真宗の門徒から念仏の声が聞かれなくなりました。お念仏を失うことは仏ご自身を失うことです。お念仏を捨て、「念仏往生の願」を無視して、いったい浄土真宗はどこへいくのでしょうか。(了)